

学校法人宮城学院 宮城学院女子大学

1 研究テーマ及び研究の観点

探求的学びを実現する自然体験・社会体験活動

—生活を核とした教育課程のデザイン—

幼稚園教育においては、子どもの生活をいかに充実させていくかということが、極めて重要なテーマとなる。それぞれの幼稚園では、子どもの主体的な体験活動を重視した保育内容が実践されているが、それらの「体験」が生活から分断された体験であって、「生活による教育」は実践できない。子どもの学びが実現する有意義な体験活動とは何なのか、それが学びを実現する意味のある経験 (meaningful experience) となるには、どのような教育方法をとる必要があるのか。本研究では、これらの課題を明らかにするために、研究者と実践者が協同して実践を分析し、幼稚園教育における教育課程について検証した。

2 地域の概要

【宮城県仙台市】

地域の範囲 (市区町村名等)	人口	幼稚園		保育所	
		幼稚園数	幼児数	保育所数	幼児数
仙台市	千人 1,032	園 (国) 1 (公) 3 (私) 109	人 16,197	園 (公) 45 (私) 68	人 11,745
合計	1,032	113	16,197	113	11,745

(平成20年 12月末日現在)

仙台市内の幼稚園の約95%が私立幼稚園であり、私立幼稚園がその任務の多くを担っている。一方、保育所については、10年ほど前までは、公立保育所がその任務を担っており、この地域においては、明らかに「幼稚園は私立、保育所は公立」という構造となっていた。この構造により、これまで幼稚園と保育所が共に幼児期の子どもの教育を担う場所として協同して研究や実践を検討する状況をつくれずにきた。

しかし、認定子ども園の検討、保育所の民営化、幼稚園の保育所併設など近年の地域の幼児教育環境の変化は、結果として幼児教育の構造的見直しを求めることにもつながり、幼稚園、保育所、公立、私立の枠を超えた研究会、研修会の実施や、共同研究の場がもたれるようになりつつある。

そうした場を提供する役割の多くを、幼稚園教諭や保

育士を養成している大学が担っており、今後、ますます地域の養成校は、教員の養成の場であると同時にリカレントの場であり、実践研究の指導的役割を果たすと同時に研究者と実践者が対等な関係で、協同して実践を研究することが求められるようになるのではないかと。

本研究は、これまで、数年にわたり研究者と実践者が共に実践を検証してきた市内の私立幼稚園の実践に対して、あらたに他領域の研究者も含めて多様な専門家が集い、実践を読み解くことで、実践をより深め、新たな実践をつくり出すための試みのひとつでもある。

本研究の成果は、一幼稚園の実践の検証にとどまらず、研究者と実践者が協同した研究的実践の在り方を検証することにもつながるものである。

なお、研究成果と研究体制を、一つのモデルケースとして、今後はさらなるネットワークづくりをしていくことで、地域の幼児教育の充実を目指して行きたい。

3 研究協力機関

学校法人 仙台みどり学園みどりの森幼稚園 (宮城県仙台市)

4 研究の内容及び方法

研究協力園における保育内容の中で、本研究では、特に自然体験・社会体験活動に注目し、実践された内容を実践者と研究者が読み解き、リフレクションしたうえで、次なる実践を構築していくという体制をつくった。その上で、教育課程を見直し、充実した保育内容の在り方を探った。

本年の実践は、以下の3つの視点から進めている。

① 地域との連携：

自然体験のひとつとして、地域の農家と連携して、収穫体験等を中心に保育内容を検討した。その際、収穫体験が一過性の体験に終わるのではなく、その後の保育につながり、子どもの探求を生み出すためには、どのような環境構成が必要なのか、実践を通して検証した。

【事例① 農家との連携】

園の給食の食材を運んでくれている地域の農家から「今年はきゅうりが生り過ぎて困っている」という話を聞き、畑にでかけ収穫体験をすることからひとつの実践が深まっていく。園内の畑に

出来たきゅうりとは異なる広大な畑で、収穫を体験することは、こどもたちにとって文字通り「自然体験」であった。食べきれないほどのきゅうりを収穫した子ども達は、このきゅうりをどうするか、という課題に向き合うことになる。クラスで相談し、これまでの経験から漬げ物にするという方法を知り、挑戦するが、カビがはえたり、塩辛くておいしくないなどのさらなる課題に出会う。

食べ物博士に知恵を借りたり、大きくなりすぎたきゅうりから種をとるなどの不思議に出会いながら、子ども達は「きゅうりの収穫体験」をひとつの契機として、仲間と共に自分たちの抱いた不思議と課題を解決していく。

「きゅうりの収穫」は、年度当初の予定されていた計画ではなかったが、いつもおいしい食材を運んでくれる農家のおじさんの「生りすぎて困っている」という突然の話題から、教師は、教育課程を軌道修正し、子どもの抱いた興味や関心、今の学びに寄り添いながら、環境を再構成していく。

「生りすぎて困る」という自然の不思議、カビや種への関心、保存の知恵、かびてまずい漬物をなんとかおいしく食べたいという気持ちなど、この実践のプロセスの中で、子どもは多様な体験をつなぎ合わせて行く。

この実践は、幼児教育における自然体験の意味、体験と生活の連動を再考し、幼児教育における教育課程を検討する上で、極めて意味のある物語を作り出している。



<生りすぎて困っているきゅうりの収穫>



<食べ物博士に相談しよう>

② 生活に位置づく環境の検討：

幼児教育は、環境を通して行う。本研究では、幼児教育における生活を核とした教育課程を見直すために、幼児教育における生活の意味を再考し、子どもの生活を充実させていくためには、幼稚園内外の環境をどのように構成すればよいのかを検証した。

【事例② 体験を生活へ】

収穫してきた稲穂を幼稚園に持ち帰り、園の環境を再構成してみる。米の収穫は、遠くの田んぼで行った一回の体験ではあるが、園に持ち帰った稲穂は、子どもの身近な関心事として、その後も子どもの生活に位置づいていく。子ども達は、常に稲穂を眺めながら、脱穀に適切な時期を皆で検討し、様々な脱穀の方法を試み、探求する。残った藁に対しても興味が深まり、ごっこ遊びのわらの家や笹作りへと展開する。

一回の収穫体験が、子どもの生活に位置づくことで、新たな体験を生み出し、それらが子どもの身近な課題となっていく。



<脱穀を試みる>



<藁の家作り>

③ 保育内容としての自然体験の再考：

幼稚園教育においては、領域環境の観点からも自然体験を重視している。しかし、教育的意味のある自然体験とはいかなるものなのかという検証は十分に為されていない。上記②と関連付けながら、子どもの生活に位置づき、幼児期に体験させるべき自然体験とはどのようなものなのか、実践を通して検討した。

【事例③ 「自然」を体験することの意味】

子どもが身近に自然を体験するために、手の届



＜サイカチ沼探検＞

くところの自然環境を充実させることは、極めて意味あることである。日々、見たり、触れたり、感じたりできる自然があることで、子どもは自然の変化を体験し、探求していくことが出来るからである。一方で、操作することも出来ない自然の驚異に出会うことも大切なのではないかという仮説のもとで、研究園では、地域の里山や農家にたびたび訪れてみた。壮大な自然の中に身を置くことは、閉じられた教育空間では実現できない体験を子どもたちに提供することにつながっている。

5 研究成果及び今後の課題

① 研究成果

本研究における実践から、次のような成果を得た。

1. 自然体験、社会体験を充実させていくためのひとつの観点として、地域との連携、地域の環境(物的・人的)を利用することにより、より保育内容を充実させていくことが可能となる。そこでの体験は、一過性の体験ではなく、体験が次なる体験を生み、子どもの日常(園生活及び家庭生活)に連動していくような教育課程を作り出す必要がある。
2. 生活による実践をめざす幼児教育においては、生活を意味あるものにしていく必要がある。生活を意味あるものにするとは、為された体験が、子どもの生活から分断し、過ぎ去っていくものではなく、連続した経験となって子どもの学びを生成していくことである。そのためには、子ども自身が環境に関わりを持ち、常に探求を生み出すように環境構成が必要である。
3. 幼児教育で大切にしたい「自然体験」は、単に自然に「触れること」ではなく、子どもの気づきや関心を生み、自らかわり、思考し、反省し、探求し、表現するなどの深まりをもつことにこそ意味がある。自然体験を契機に探求し、納得いくまで活動するためには、それらの体験を生活に位置づけていくことが必要であり、教師は、そのための環境を構成する必要がある。

一方で、「自然体験」のもたらす意味は、自分たちでは操作するともできないその大きさや不思議さに出会うことでもある。そこで出会う驚異の体験が、子どもの次なる探求へとつながると考えられるからである。

- 4 教師が系統的に知を教授するという教育方法を採らない幼児教育では、教師が事前に計画した教育課程は、必ずしも有効ではない。子どもの生活を読み取り、環境を再構成し、子どもの体験から紡ぎだされた学びとそこから派生するプロセスに着目しつつ、評価することをデザインしていく必要がある。

② 今後の課題

1. 本研究のような質的研究においては、研究の成果と評価が常に問われるところである。本研究においても、ポートフォリオ評価、ドキュメンテーションなどを試みているが、十分な評価とはなっていない。より効果的かつ客観的な評価をどのように進めていくかは、課題として残されている。実践を言語化し、有効な記録とするための方法論の検討を継続的に検討したい。
2. 本研究においては、市内の一幼稚園を研究拠点として、実践、研究を進めた。ここでの成果を地域に発信し、また共有していくための方策を検討していく必要がある。次年度以降は、
 - (1) 研究協力園を複数にし、地域の研究拠点を増やすこと、
 - (2) 研究の成果を様々な形で発信する機会を持つこと、
 - (3) 地域の教育委員会や幼稚園団体と共に、これまでの研修の在り方を検討し、それらの研修、研究制度と連携しながら、地域の幼児教育の質的向上を目指すこと、などを、検討している。
3. 本研究では、実践に多様な分野の専門家がかかわり、実践者と共に保育内容をつくり出していくことを試みた。子どもたちの日常の生活に、日頃から生活を共にしていない研究者が入ることに課題がないわけではないが、専門家と共に実践者が保育内容および教材研究をすすめることには、大きな意味がある。本研究では、大学と幼稚園が連携することを試みているが、大学も幼稚園も地域に生きる拠点となるためには、様々な分野において、こうした連携が可能となるようなネットワークづくりが必要であろう。

兵庫県明石市

1 研究テーマ及び研究の観点

(1) 研究テーマ

自然体験などを通して心豊かな子の育成をめざして

(2) 研究の観点

本市には公立幼稚園が28園あり、幼児数は少しずつ減少傾向にある。市東部では年少、年長が各1クラスという小規模園がある一方、中部、西部には大規模園が見られる。地域全体として核家族化、都市化が進むなか、自然とのふれあいや野外での集団遊び、高齢者とのかかわりなど、この時期に必要な直接的、具体的な体験の機会や場を用意し、子どもの生活をより豊かなする必要がある。

そこで、幼稚園を核にし、園内、園外にある自然や園児自身の手で育てる動植物などとふれあうことを通して、また、高齢者の人たちとかかわりをもつことによって、自然を大切に、生命を尊重する心と豊かな感性の育成を図る。

(3) 研究の目的

- 動植物を育てたり、地域の自然や施設などを活用したりして、様々な自然体験の機会を通して、自然を大切に、生命を尊重する心と豊かな感性を育む。
- 自然、社会体験を通して保護者や高齢者、地域の人とかかわり、共感や感謝の気持ちをもつ。

2 指定地域の概要

(1) 地域の概要

地域の範囲 (市区町村等)	人口	幼稚園		小学校		保育所	
		幼稚園数	幼児数	学校数	児童数	保育所数	幼児数
明石市	千人	園 (国) 1 (公) 28 (私) 2	人	校 (国) 1 (公) 28 (私) 0	人	40園 (公) 11 (私) 29	人
合計	293	31	3,330	29	17,959	40	3,509

(2) 指定地域における幼児教育に関する課題及びこれまでの取組

平成19年度に始まった本調査研究事業を通して、子どもたちが身近な自然の変化に気づいたり関心をもったりするようになっただけでなく、教師自らの自然への関心が深まったり、保護者、地域の協力体制の充実が図られたりするなどの成果が見られた。しかし、協力園の取組を市内28幼稚園に伝えることや2園相互の研究を生かしながら研究を進めることができなかった。

そこで、平成20年度は、協力園以外への研究の広がりを目指し、再度、研究のねらいを焦点化し、より分かり

やすく、取り組みやすいものとし、さらなる研究の深化、充実を図った。

3 研究協力機関

幼稚園名		3歳児	4歳児	5歳児	合計	教職員数
明石市立播陽幼稚園	学級数	0	1	1	2	5
	幼児数	0	28	31	59	
明石市立二見幼稚園	学級数	0	2	2	4	6
	幼児数	0	37	49	86	

4 研究の内容及び方法

(1) 研究方法

- ① 幼児の自然体験を通しての変容や保護者の自然体験への関心等について、アンケート（二年間の変容を見るため、5歳児について同一項目で実施・分析）を実施する。
- ② 幼児の自然体験を充実するために、園内外の自然環境を見直し教師間で共通理解を図る。
- ③ 2年間を見通した自然体験活動や社会体験活動などの年間指導計画作成し実践につなぐ。
- ④ 事例研修により幼児の姿を把握し、具体的な指導の在り方を探る。
- ⑤ 全市一斉のアンケート調査（園内自然環境と教師の自然の関わる意識調査）と講演会及び実施園合同研修会を実施する。

(2) 研究内容

自然体験活動	研究の取組
身近な動物の飼育や野菜・草花の栽培・収穫 ・ジュウシマツの飼育 ・一人一鉢（イチゴ） 園内の畑（ジャガイモ・タマネギなど）	・友だちや教師との共感の中で生命の大切さに気付く。 ・自然の不思議や変容に気付き、好奇心をもつ。 ・収穫の喜びを味わうと共に、食への関心が高まる。 ・自分でできることを見付け、主体的に取り組む。
地域の自然や施設の活用 ・地域の田畑（田植え・稲刈り） ・魚の棚商店街、たこフェリー乗車体験	・五感を通して、自然を感じる。 ・身近な地域の自然や施設に親しみをもつ。 ・地域の良さを感じ、地域を好きになる。
親子体験・地域の人とかかわり ・須磨鉢伏山 山登り ・明石石が谷公園 乗馬体験	・体験を通して、保護者や地域の方と共感する。 ・体験の積み重ねにより、地域の方を身近に感じる。 ・保護者や地域の方に、感謝の気持ちをもつ。
教師の研修 ・二園の事例報告と協議 ・アンケート調査（明石市28園）	・教師自身の専門性を高める。 ・2園での取組を、市内全園に広める ・実践発表と講演会（講師招聘）

5 研究成果及び今後の課題

(1) 研究成果

- ① 園内外の自然環境を見直し、幼児が身近な動植物に触れたり育てたりする環境を構成したとて、幼児自身が自然の変化に気付いたり、生命の大切さに触れたりすることができた。また自然体験を通して、幼児が発見したり感動したりしたことを友達や教師と共有する経験を重ねる中で、幼児の自然体験に対する意欲や関心・期待感はさらに高まってきた。
- ② 2年間のアンケート調査(※)から、幼児・保護者共に自然体験への関心の変容が見られた。特に、幼児自らが絵本や図鑑を手にとり、見たり調べたりすることや、保護者も園近辺の施設に関心をもち人とのかかわりをもつようになった。そこで、親子で自然体験できるよう保護者ボランティアを募ることで、保護者自身が、幼児の感動体験に直接触れ、自然体験の大切さを実感したり自然の変化や不思議さに気付いたりした。体験そのものが、幼児との触れ合いや感動を共有する場となり、幼稚園が取り組んでいる自然体験の重要性を発信する機会となった。
- ③ 園で収穫した野菜を使って親子で料理し食する機会をもったことで、好き嫌いが多く家では一切食べなかつた我が子が友達と楽しそうに食べる姿等を通して、家庭でも新たに畑を作り野菜の栽培に取り組む等、家庭での生活に様々な自然体験を取り入れようとする等、少しずつではあるが、園での取組が家庭へと広がってきた。
- ④ 地域の自然や施設の活用を通して、地域の人と触

(※) アンケート調査結果

	19年度				20年度			
	A	B	C	D	A	B	C	D
親が園の自然体験活動を通して、一層自然体験の大切さを考えるようになった。	27%	58%	9%	6%	47%	50%	3%	0%
親が身の回りの小動物や植物に興味・関心を持つようになった。	23%	65%	9%	3%	38%	59%	3%	0%
子が身の回りの小動物や植物に興味・関心を持つようになった。	52%	42%	6%	0%	47%	50%	3%	0%
親が自然の中で遊んだり、触れ合ったりすることが増えた。	21%	49%	27%	3%	25%	65%	10%	0%
子が自然の中で遊んだり、触れ合ったりすることが増えた。	49%	30%	21%	0%	34%	60%	6%	0%
親が地域の自然や施設に関心をもち、活用するようになった。	15%	46%	36%	3%	35%	56%	9%	0%
子が地域の自然や施設に関心をもち、活用するようになった。	18%	45%	37%	0%	37%	44%	19%	0%
親が自然に関する絵本や図鑑に興味を持ち見るようになった。	24%	40%	33%	3%	37%	41%	19%	3%
子が自然に関する絵本や図鑑に興味や関心を持ち見るようになった。	42%	40%	18%	0%	44%	50%	3%	3%

A—とてもあてはまる B—ややあてはまる C—あまりあてはまらない D—あてはまらない

れ合う機会が増え、良いつながりが生まれてきた。このことは、教師自身が地域の自然や施設環境を見直すよい機会になり、教育課程に位置付けた地域との交流が定着しつつある。

- ⑤ 講演会等から、保護者自身が地域の歴史や特性を知り、ふるさと明石を愛する気持ちがもてるようにした。保護者自身にふるさとの良さを理解してもらうことで、幼児のふるさとを思う気持ちにつなげていくことができる等、保護者と共に取り組んでいくことが有効であることが分かった。
- ⑥ 園内自然環境と教師の自然の関わる意識調査の全体的なアンケート調査から、市内各園が自園の自然環境を見直しそれぞれに工夫している実態が明らかになった。それぞれの状況を情報交換することで、明石市の自然環境の再発見や教師自身の自然にかかわる意識改革になった。

(2) 今後の課題

- ① 自然体験は、季節や園・地域の実態・環境により取組の内容が大きく変わる。園の状況は様々であるが、「自園なら何ができるか」という観点をもって園内外の環境や地域との関連について見直しを常に図っていくことが大切である。
- ② 今回の研究で培った様々なネットワークを継続して活用し、幼児の豊かな自然体験につながる取組を精選し教育課程にきちんと位置付けていくことが必要である。少人数で運営する幼稚園だからこそ、教員が異動しても継続して取り組める教育内容の充実を図ることが大切である。

沖縄県北谷町

1 研究テーマ及び研究の観点

(1) 研究テーマ

身近な環境とのかかわりをとおした望ましい幼児教育の在り方

～自然・人・もの・こと等とのかかわりをとおして～

(2) 研究の観点

- ① 地域の自然公園活用や地域散策等の野外活動を通して自分達の周りに気づく。
- ② 園内外における自然環境を活かし、環境構成の工夫を図り動植物の飼育栽培等自然体験活動を充実させる。
- ③ 幼児の発達や生活の連続性を踏まえ、家庭、地域、保育所・幼稚園・小学校・中学校連携を進める中で高齢者福祉施設や公共施設等との交流を工夫する。
- ④ 地域行事への参加や幼稚園行事等への地域の人々の参加の工夫をする。

(3) 研究の目的

本町幼稚園の生活実態調査より、核家族率77%が高く、降園後の状況は、預かり保育利用や学童保育利用も多い。また、家庭においては、自然の中で遊ぶ経験や地域とのかかわりが十分であるとはいえず、地域環境の変化や少子化、核家族化などの影響を受けているように思われる。

そこで、本研究では、発達に必要な豊かな体験活動ができるよう、家庭、地域、保育所、小学校、中学校との連携を深め、園内環境の見直しや地域の自然、人材、施設の有効活用し、望ましい幼児教育ができる環境構成や援助の在り方を探っていく。

2 地域の概要

(1) 公立、私立幼稚園、保育所数

公立幼稚園	私立幼稚園	公立保育所	認可保育所	無認可保育所
4	0	4	3	21

(2) 研究テーマに関するこれまでの取組や課題

- ・本町は、共働き家庭が多く近年、商業化、観光化、河川の整備事業等が進んだことで、以前のように子ども達が地域の中で自然に触れ合ったり、友達同士遊ぶ姿を見かけなくなっていることから、園内で花や野菜の栽培や小動物との触れ合いができるための環境構成や園外保育等で地域と触れるようにしてきた。しかし、親子での自然体験や地域の人たちとのかかわり・公共施設利用を意識した取組は弱かった。
- ・本町の公立幼稚園は4園で（1年保育）小学校と併

設し、校長が園長を兼務している。運動会や交通安全教室等の行事を一緒に行ったり、小学生との交流保育の取組等、日頃より幼小連携がしやすい環境であるため、小学校へスムーズに就学ができています。また、中学生の職場体験活動等を含めた異年齢とのかかわりの中で、親しみをもち、あこがれや思いやりの気持ちを育む取組の工夫を図ってきた。さらに、保育所・小学校・中学校との教師間の共通理解を図りながら計画的な連携を工夫することが必要である。

3 研究協力機関

北谷町立北谷町幼稚園、北玉幼稚園、浜川幼稚園、北谷第二幼稚園

4 研究の内容及び方法

(1) 研究の具体的内容

① 幼児生活実態調査の実施

自然体験、社会体験活動へのかかわりについて、全協力園の保護者を対象とした年2回幼児生活実態調査を行い、課題と研究の方向性を探った。調査結果より、核家族率が高いこと、地域の自然に触れることや地域行事等への参加率も低い実態がわかった。

② テーマの捉え

身近な環境とは、幼児の生活圏に存在するすべてのものであるが、ただ知っているだけのものではなく、幼児にとって意味があるもの、また、自分の力でかかわることができること、そして、親しみをもち、大切にしようとするのである。

そこで、幼児にとって身近な環境となるために幼稚園では、自然体験や社会体験をとおして感動体験ができるよう、家庭、地域、保育所・小学校・中学校との連携の在り方や豊かな体験活動のできる環境の工夫を図っていくことが大切である。

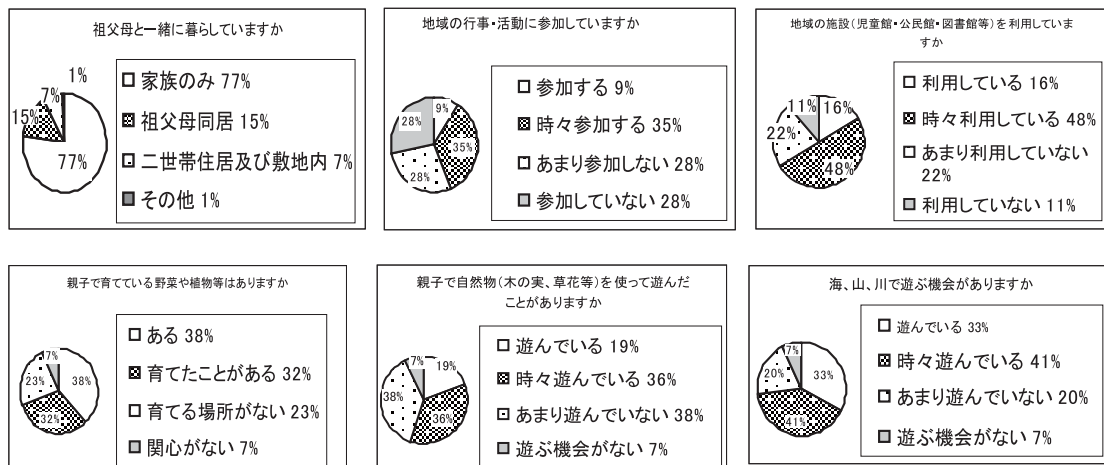
③ 自然体験・社会体験活動の年間計画作成

地域自然マップ・人材リストを作成活用しながら、教育課程に位置づけ、意図的・計画的な自然体験・社会体験活動の年間計画作成し、すぐに保育に活かせるよう配慮した。

④ 保育実践における自然体験・社会体験活動

- A. 家庭、地域、保育所・小学校・中学校との連携
 - ・保護者が参加しやすい園行事や保育活動の工夫（親子で栽培、親子で竹馬づくり、読み聞かせ等の保育サポート、地域行事の情報提供）
 - ・地域への積極的な働きかけと、保育所・小学

平成20年度本町幼稚園生活実態調査（抜粋）



校・中学校との連携の工夫。

（老人会との交流，地域の方の絵本読み聞かせ，公立図書館・児童館の活用，保育所との交流，教育計画に位置づけた幼・小連携，中学校の職場体験活動等）

イ. 豊かな体験活動のできる環境構成の構築

- ・園内の自然物探索，園内木々マップづくり，自然・社会体験マップづくり園外保育の工夫
- ・自然物を使ったあそびの工夫
- ・小動物の飼育，野菜栽培・収穫・試食（おやつ作り）等
- ・親子で苗の植え付け，小学生とじゃがいもの植え付け・収穫等

ウ. 保育実践研究

- ・全協力園で，指導助言の先生を招き，公開保育と研究協議を行い，環境の工夫や援助の在り方，指導案の示し方 etc 研修を進めながら保育の充実を図った。

(2) 研究の方法

- ① テーマの捉え，共通理解を図る。
- ② 幼児の実態把握のため，生活実態調査・分析する。
- ③ 自然・人・もの・こと等のかかわりを体験できるように園内外の環境を見直し意図的，計画的に場や機会をつくり，年間計画の作成と実践を図る。
- ④ 発見・驚き・感動の場面で教師は，幼児の姿をどう読み取り，どのように援助や環境構成をしていくか実践研究する。

5 研究の成果及び今後の課題

(1) 研究成果

- ① 幼児の興味や欲求に沿った様々な直接体験をとおして，五感を働かせ，疑問を持ったり，試したりすることで，知的好奇心が芽生え，主体的に環境にかかわり，遊びに広がりが見られるようになった。
- ② 身近な環境にかかわって遊び，友達や教師と感動体験を共有することで楽しさを味わい，言葉で伝えたり表現したりするなど豊かな感性が育った。
- ③ 様々な人々との出会いのきっかけをつくることで，幼児が周りにいる人々の存在に気付き共有体験を繰り返すことによって親しみが増してきた。
- ④ 異年齢とのかかわりを継続する中で，いたわりや憧れ，尊敬する気持ちが育ってきた。幼，保，小との教師間では，幼児・児童の育ちについて話し合い共通理解を図ることができた。
- ⑤ 保護者へ地域行事の情報を発信し参加を促したり，幼児が地域の方と触れ合う機会をつくったりしたことで，地域行事に関心を持ち参加する保護者が増えてきた。
- ⑥ 地域にある公園や公民館へ出かけたり，高齢者とかかわりをとおして，自分たちの周りに様々な人がいることに気づき，思いやりの気持ちや人の役に立つ喜びを味わうことができた。
- ⑦ 幼児や地域の実態に沿った自然体験・社会体験活動年間計画を作成したことで，見通しを持った環境構成や援助につながった。

(2) 課題

- ① 幼児が身近な環境とのかかわりをより豊かにして

いくために、家庭・地域との連携を深めていく。

- ② 学びの連続性を踏まえた保育を充実させるために、保育所、小学校との交流会、研修会、連絡会をとおして、教師間の相互理解を更に深める。
- ③ 地域の情報を収集し、自然環境マップや人材リストを活かした年間活動計画の充実を図る。
- ④ 教員の資質、能力を更に高める為に、教師の五感を磨く園内研修を計画し、充実させる。
- ⑤ じっくりとかかわる環境や体験の積み重ねができるような複数年保育に向けた調査研究を進める。